

聴覚障害

(1) 聴覚障害の基礎知識と実態把握

① 聴覚障害の基礎知識

聴覚は、環境音や音声を知覚し、人とのコミュニケーション活動を行うために重要な感覚の一つです。また、聴覚は、音声言語の発達においても重要な役割を果たしています。生後まもない新生児にも音に対する反射が見られます。やがて、周囲の人々からの語りかけや様々な環境音を聞き、自らも発声するようになり、音声によるコミュニケーション活動が活発になっていく様子が見られます。聴覚に障害があると、周囲の音や音声を十分に聞き取ることができないため、音声言語の獲得や音声によるコミュニケーションが困難になります。

聴覚障害とは、一般に音が耳介から大脳の第一次聴覚野に至るまでの経路のどこかの部位に障害が生じている状態を指します。耳介から鼓膜までを外耳、鼓膜の奥にある耳小骨から蝸牛までを中耳、蝸牛から聴神経までを内耳といいます（図Ⅱ-2-1）。障害部位により、聞こえ方が異なります。また、障害部位により、音のエネルギーが内耳の感覚細胞を刺激するまでの音響物理的な障害と、感覚細胞から第一次聴覚野に至る神経系の障害とに分けることができます。前者を「伝音難聴」、後者を「感音難聴」と呼び、障害が両方にわたる場合を「混合難聴」といいます。

聴覚に障害があると、周囲の音や音声は聞こえていたとしても、微妙な音の聞き分けができず「何か言われているのは分かるけれども、何と言われているのかが分からない。」といったように、言葉の意味理解が困難になります。

聴覚障害の状態は、音の強さ（デシベル：dB）と高さ（ヘルツ：Hz）によるオーディオグラム（図Ⅱ-2-2）により表現されます。しかし、聴覚障害による聞こえの困難さはオーディオグラムのような客観的基準で表されるものだけではありません。本人の年齢や生活環境、音声言語の獲得の状況などにより、学习上又は生活上の困難さに個人差があることも考慮する必要があります。聴覚障害に対して教育的にかかわる場合には、聞こえにくさに対する総合的な視点が必要となります。

② 聴覚障害のある子供の実態把握

現在、生後まもなく聴覚障害の有無を判定する新生児聴覚スクリーニングシステムが整備されてきており、養育者と医療や教育の専門家等が適切な連携を図り、早期からの実態把握や教育的対応を進めていくことの重要性が認識されています。そのためには以下の項

目についての理解が大切です。まず、聴覚障害の原因、部位、程度などについての基本的な理解が必要となります。また、聴覚障害のない子供の聞こえと言葉の発達について理解しておくこと、さらに、聴力検査の手順や判断の基準となる聴力レベルについても理解しておく必要があります。

また、養育環境についての理解も必要です。子供が音や音声言語に関してどのような環境で養育されているのかについての情報も大切になります。次に、補聴器をはじめとする聴覚補償機器についての知識や操作・調整の技術も聞こえの発達を支える上で大切になります。現在は人工内耳の手術を受ける子供たちが増えていることから、手術や機器についての基本的知識も必要です。

ア 聞こえの発達

聴覚障害のある子供が、補聴器等を利用したからといっても、聴覚障害のない子供と同じように周囲の音や音声を聞き取り、聞こえを発達させるわけではありません。補聴器等の効果や聞こえの状態、本人の保有する聴覚を通して周囲の音や音声をどの程度理解しているかを養育者や専門家が注意深く把握し、子供が音や音声の意味を理解することを意図した場面や活動を設定していく必要があります。その意味で、子供の聴覚障害に関する実態把握とともに、聴覚を活用しやすい環境整備やかかわり方の工夫も必要です。

イ コミュニケーションの発達

聴覚障害のない子供は、周囲の音や音声を聞き、話し言葉によるコミュニケーションを発達させていきます。しかし、聴覚障害があると、話し言葉によるコミュニケーションは、音・音声に依存することが多いため、このようなコミュニケーションの発達が困難な状態に置かれることになります。

また、はじめは周囲の音・音声を受け身的に聞いている子供も、成長とともに自分が獲得した話し言葉を用いて他者や周りの環境に積極的にかかわろうとしていきます。聴覚障害があると、このようなコミュニケーションに用いられる感覚経路の一つである「聴覚-音声回路」が円滑に働かないために、音や音声情報が子供に伝わりにくくなります。実際のコミュニケーションは、相手の表情や周囲の出来事、人とのかかわりなどの場面で様々な感覚を用い、総合的に行われるものですから、かかわり手が音や音声だけに意識を向け過ぎると、子供のコミュニケーションに対する意欲をそぐことにもなりかねません。聴覚障害児のコミュニケーションの発達については、視覚を用いることが重要です。周囲の音や音声の意味が見て分かるような配慮や手話の活用によるコミュニケーションは聴覚障害児の発達を支えるものです。このように、コミュニケーションの発達を支えるためには、聞くことや見ることについての配慮とともに、コミュニケーションに対する子供の意欲を高めるかかわり方が求められます。子供たちは様々な人々や集団の中でコミュニケーションを体験し、コミュニケーションのとり方を学習していきます。このため、家庭や地域に

おける子どものコミュニケーションの状況を踏まえた教育的対応が必要になります。

ウ 聴覚障害の理解

聴覚障害を理解する上で重要な課題として、一つ目はコミュニケーションが挙げられます。聴覚障害は、音や音声聞きにくい障害であることから、音声言語のコミュニケーションが円滑に進みにくいことを理解するのは重要ですが、聴覚障害がコミュニケーション全般を困難にすると理解することは正しくありません。視覚やその他の感覚を用いるコミュニケーションが多くの集団や社会で用いられているためです。また、音や音声聞きにくいのために音声言語や音を通して学ぶことが困難であるとしても、このこと自体が聞きにくい子供の学習を妨げると考えることも適当ではありません。学習すべき情報は聴覚だけでなく、視覚やその他の感覚も重要な働きを担い、最終的には多くの感覚が効果的に使われていきます。したがって、聞きにくい子供たちの学習をはじめ、コミュニケーションや社会参加などを考えるときには、聴覚障害の状態を把握するとともに、聞きにくい様々な感覚を活用したかかわりが大切になります。

二つ目の課題は、本人や周囲の人々の障害に対する意識や態度の形成に関することが挙げられます。聞きにくい子供をもつ保護者の大半は、自分自身が聞きにくい経験がない人々であると推察されます。このため、聞きにくさに対する保護者の意識には、はじめに接する医療や教育の専門家の説明の仕方や態度が大きな影響を与えます。聞きにくい人々の実際のコミュニケーションや社会参加の様子についての理解がないままに、聴覚障害を過度に否定的に意識することにより、将来の発達への期待がそがれる可能性があります。

また、聴覚障害のみに注目するあまり、全体的な発達や学習、コミュニケーションのための多様な方法に目が向かなくなることもあります。このため、聴覚障害の適切な理解とともに、発達や学習の支援が可能になるような保護者の障害に対する意識や態度への働きかけが大切です。聞きにくい子供たちは保護者や地域の人々との適切なかかわりの中で、自己意識を発達させていきます。子供の社会参加や自己実現に向けて、周囲の人々が協力しながらかかわることが大切であり、聞きにくい人々の社会参加の様子や問題解決の方法などについても、様々な活動を通して取り上げていくことが必要です。